【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和3年度学校評価 結果

様式１（小・中）

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	武雄市立山内西小学校
1　前年度 評価結果の概要	①知的な学校【知的好奇心の育成】について 全職員が「授業づくりのステップ１２３」の「ステップ３」を目指すという共通理解のもと、日々の教育活動やプログラミング教育等の教育実践を行ったことで、児童アンケートの「毎日の授業が分かる」と回答した児童が95パーセントとなった。共通実践を通した教職員の資質向上を図れたことが、この結果につながったと思われる。今年度も全職員による共通実践を継続して行っていきたい。 ②居心地のいい学校【自己肯定感の育成】について 毎日の「山内合言葉」の確認、「思いやりの木」プロジェクトの定期的な取組、人権週間・平和週間の取組を行ったことで、児童アンケートの「学校が楽しい」と回答した児童が９１%、「自分や友達のことを大切に思って行動している」と回答した児童が９４%に達した。全職員で共通理解を図って、児童一人ひとりの存在を認め合うようにしたことで、自他の生命を尊重する心や思いやりの心が育まれたと考える。今年度も取組内容の意義を確認し、全職員で共通理解を図りながら教育活動に取り組んでいきたい。 ③元気な学校【挑戦心の育成】について 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年とは違った形で運動会、走ろう大会等の体育的行事を工夫して実施し、児童の体力向上を図ることができた。また、給食委員会や栄養教諭が放送等で児童に職の大切さを伝えたことにより、児童の食に対する意識が向上し、給食の残菜が少なくなったり、児童アンケートの「好き嫌いせずにバランスよく食べている」と回答した児童が９２%に達したりした。今年度も取組内容の意義を確認し、全職員で共通理解を図りながら教育活動に取り組んでいきたい。
2　学校教育目標	**やる気いっぱい　笑顔いっぱい　元気いっぱい　輝く山内西の子**
3　本年度の重点目標	**①全職員の共通実践を通した教職員の資質向上　　②人権教育の更なる充実による児童の自己肯定感の育成　　③体育的行事の工夫による児童の健康・体力つくりの向上**

4　重点取組内容・成果指標　　中間評価　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師が90%を上回る。 〇単元テストの正答率が80%を上回る。	・「授業づくりステップ１２３」のチェックリストを活用した自己評価を定期的に行い、授業改善の意識の継続を図る。 ・「家庭学習のてびき」を全家庭に配布し、家庭への啓発を図るとともに、「授業ノート」や「自主学習ノート」などを掲示し児童の学習への意欲を喚起する。 〇「学力向上だより」の発行を年間3回以上行う。	A	・「授業づくりステップ１２３」のチェックは2か月に1回実施している。4月は「学級全体で話し合う」、7月は「振り返る」の項目のポイントが低かった。そこで、職員連絡会などを利用して本年度の学力向上の方向性について共通理解を図った。 ・校内研修で、「5月実施の学力調査の分析」を行い、本校児童の実態や今後の取組について共通理解を図った。 ・学力向上便りは1学期に5回発行し、授業の様子や自主学習のがんばりなど、児童の様子を紹介し、家庭に伝えることができた。	A	・「学力向上対策評価シート」のマイプランの成果指標達成は、52%であった。「授業づくりステップ１２３」では、全ての項目の平均は1.4点（３点満点）で、「まとめ」や「振り返り」の項目が低かった。授業改善の意識はあるが、授業実践については自己評価が伸びない状況である。実践につながる取組を工夫する必要がある。 ・単元テストの正答率は、国語科「知識・技能」85.2、「思考・判断」70.4、算数科「知識・技能」87.3、「思考・判断」75.2であった。国語・算数ともに「知識・技能」は8割に到達しているが、「思考・判断・表現」の領域に課題がみられ、高学年算数科では、7割に到達しなかった。正答率の低かった内容については、今年度中に学級で確実に取り扱う予定である。 ・児童が意欲的に取り組むための授業改善や、学力定着を目指した家庭学習への取り組ませ方など、「授業のチェックリスト」を参考にしたり、児童の実態を基に共通理解した改善内容を共通実践していきたい。 ・学校評価の児童アンケートでは、「毎日の授業がよくわからない」と回答する児童が10%弱、「学年にあった家庭学習ができていない」と回答する児童が20%弱みられる。今後も継続してきめ細やかな指導・支援を行っていく必要がある。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	〇「学校が楽しい」と答える児童を90%以上にする。 〇「自分や相手が大切だ」と思う児童を85%以上にする。 〇気持ちのよい挨拶や返事・言葉遣いを意識して行動できる児童を（自己評価）85%以上にする。	・「ふれあい班」を編成して、歓迎遠足や運動会等で異学年交流の機会を設ける。 ・「ふれあい道徳」を年に1回以上全クラスで実施し、学級便り等で保護者に知らせる。 ・人権・同和教育、男女平等教育は全教育課程に位置付け、教育活動の中で子どもと周りの人のつながりや一人ひとりの存在を認め合うようにする。 ・登校班や委員会等で挨拶運動を行い、意欲付けを図る。	A	・歓迎リモート集会で、ふれあい班での交流の機会を設けることができた。 ・9月29日にふれあい道徳を実施し、約65%の参加があった。また、参加した保護者に対して実施したアンケートでは、「充実した授業だった」という旨の感想が集まった。 ・各学級、学級活動において、友達のよさや自分の長所を認め合う時間を設けることができている。	A	・全校で挨拶運動を行い、進んで挨拶をすることへの意欲付けすることができた。 ・児童のアンケートでは、「学校が楽しい」と答える児童が９１%、「自分や相手が大切だ」と思う児童は９４%、「気持ちのよい挨拶や返事・言葉遣いを意識して行動できる」児童は（自己評価）９１%だった。また、職員アンケートでは、９５%が児童の人権意識を高めることができたと回答し、学校行事のことを考えた人権・同和教育などの取り組みがなされていた。保護者のアンケートの評価も高いが、「上級生が下級生に汚い言葉で話している。接し方を指導してほしい」という意見があり、今後の課題である。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	〇「やまうち合言葉」の「優しい言葉を周りの人に」を意識して行動できる児童（自己評価で）を90%以上にする。	・「教育相談」「いじめアンケート」を実施し、いじめや気になる児童の早期発見・早期対応に努める。	B	・教育相談月間を6月に設け、「いじめ・体罰アンケート」を全児童及び保護者に対して実施した。その後、気になる児童に対しての教育相談を全学級で実施し、全ての事案に対応することができた。 ・全児童への心のアンケートの実施が6月と11月のみであり、教育相談の機会が少ないことから、2学期からは毎月「教育相談アンケート」を全児童を対象に実施し、気になる児童との教育相談を毎月行う。	A	・保護者のアンケートでは、「いじめ・体罰アンケート」や「心のアンケート」がいじめの防止につながっていると答える保護者が９５%だった。また、職員アンケートでは、９１%がアンケートをとったことにより、いじめを早期に発見したり、いじめを防止することができたと思うと回答しており、アンケートが有効に活用されたことが分かった。 ・保護者アンケートより「いじめのアンケートの回数を増やして欲しい」や「スクールカウンセラーの日程と時間を増やして欲しい」との意見があり、今後の課題である。
	〇目標と評価を明確にした道徳科の授業実践	〇職員アンケートで「目標と評価を意識した授業を実施できた」と思う職員を90%以上にする。	・校内研究として、各学級で全体研やグループ研を行い、目標と評価について話し合うとともに、授業力の向上を図る。 ・校内研究の後にスキルアップ通信を配布し、職員の意識の向上に努める。	A	・先行授業を7月に行い、指導案や事後研究会の形式の提案を行った。今後は、各学年グループで目標と評価を意識した授業実践について話し合っていく。 ・校内研究の後だけでなく、毎週スキルアップ通信を配布し、道徳科の授業のポイントを紹介したことで、職員の意識の向上につながった。 ・学校行事とからめた道徳科の授業の在り方を計画し、授業構想を提案することで、教育課程全般での道徳科の授業を試みているところである。	A	・各学年グループで検討を重ね、目標と評価を意識した授業実践を行うことができた。 ・職員アンケート「目標と評価を意識した授業を実施できた」と考えた職員は77%となり、目標に届かなかった。しかし、５月のアンケートでは42%であり、職員全体で目標と評価を意識して授業を行おうとする職員が増えた。 ・スキルアップ通信を毎週発行した。道徳科のポイントだけでなく、道徳科と特別活動との関連に関する資料なども記載したことで、職員の意識の向上を図ることができた。
●健康・体つくり	●「安全に関する資質・能力の育成」	●児童生徒の交通事故を0（ゼロ）にする。	・各学級で安全教育について指導する。 ・登校班で歩いてくることを奨励し、交通ルールなど定期的に全校児童で確認をする。 ・自転車点検表を年2回配布し、安全な自転車に乗るようにする。 ・長期休業前には、くらしの話をしたり、地区児童会をしたりして、安全な過ごし方を意識させる。	A	・集団登校については、トラブルなどがあったらすぐに、児童の話を聞いて、指導を行ってきた。また、２学期の始業式には、集団登校の目的などを全校児童に話をして、意識付けを行うことができた。 ・自転車点検表を夏休み前に配布し、各家庭での点検が行われたので、現在交通事故ゼロである。 ・夏休み前には、夏休みに気をつけることを、児童が理解しやすいように劇にして伝えた。夏休みの事故もゼロであった。	A	・登校班の編成については、地区児童会で来年度の新登校班編成を行い、地区理事にも確認してもらうことで、地域との連携を図りながら進めることができた。 ・自転車点検表を冬休み前に配布し、各家庭での点検が行われたので、現在も交通事故ゼロである。 ・地震火災避難訓練を実施し、防災への意識と知識を高めることができた。 ・冬休み前には、冬休みに気を付けることを児童が理解しやすいように、「にしっこのキーワード」にまとめて話した。児童は、キーワードを合言葉として、日頃の生活で意識しながら生活できていた。
	〇「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	〇「健康に食事は大切である」と考える児童100%を目指す。 〇朝食をとって登校する児童生徒90%以上を目指す。	・各学級での食育指導を行い、食事の必要性に気付かせる。 ・給食時間の放送を通して、食材の産地や調理方法に関心をもたせ、食事の大切さに気付かせる。	B	・ほぼ100%の児童が、「健康に食事は大切である」と考えているが、全体の朝食喫食率は87%だった。（6月末）朝食を毎日食べない理由として、食欲がない、時間がないが主であった。食事の大切さや生活リズムを整えることの必要性について、指導を継続していきたい。	B	・2月のアンケートでは、「健康に食事は大切である」と考える児童９８%、朝食をとって登校する児童９３%という結果だった。（回答率全児童の９０%）成果指標に近付くことができた。給食便りの発行、給食時間の放送、給食習慣の取り組み、各学級での食育授業、給食指導等は、児童の意識向上につながったとも考えられる。今後も、こうした取り組みを継続し、児童の望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成を図っていく必要がある。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・定時退勤日（毎週金曜日）を確実に実施し、18時に施錠する。 ・校務システムを利用して、職員会議等の時間を削減する。	B	・定時退勤日に18時退勤した職員は91%で、４月～９月までの時間外勤務の平均は39時間であった。個人差が大きいこと、月や曜日によって差が大きいことが課題である。 ・校務システムを活用したことで、職員集会、会議はすべて終了予定時刻より早く終了できた。	B	・定時退勤日に18時退勤した職員は92%であった。４月～１月までの時間外勤務の平均は37時間だが、勤務時間の上限（月40時間）を超えない範囲で業務を遂行できたと回答した職員は72%であった。勤務時間に差があることが課題である。 ・業務遂行に当たり、業務改善への意識をもって取り組んだと回答した職員は96%である。また、校務システムを活用したことで、職員会議はすべて終了予定時刻より早く終了した。
	〇「コミュニティ・スクール」及び「官民一体型学校」としての開かれた学校づくり	〇保護者アンケートで「開かれた学校づくりに努めている」の肯定的な回答を90%以上にする。	・地域と連携した教育活動の様子を、学校HPや学校・学級だより等で定期的にかつ積極的に情報発信する。	A	・学校HPの更新を毎月行うとともに、1学期に学校便りを13号、学力向上便りを5号まで発行するなど積極的な情報発信ができた。 ・田植えや稲刈り、アスパラ栽培についての学習で、地域学校協働本部との連携や地域の人材活用を図ることができた。	A	・学校HPの更新を毎月行うとともに、４月から１月までに学校便りを２１号、学力向上便りを１０号まで発行するなど積極的な情報発信ができた。 ・今年度、新たに米作り、アスパラ栽培、防災教育、福祉体験など地域学校協働本部との連携や地域の人材活用を図った取組を始めることができた。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果
◎志を高める教育	◎自らの夢や目標をもち、それに向けて「自分から」「自分で」努力しようとする気持ちを高める教育活動の推進	〇児童アンケートで、授業内容が「わかった」「できた」と回答する児童を80%以上にする。	・授業の振り返りを毎時間確実に実施する。	B	・授業の振り返りを確実に行うことができず、自らの学びを見つめる機会が不十分となった。自分の学びの成果と課題、自分の良さを客観的につかませることで、夢や目標に向かって頑張ろうとする気持ちを高めていきたい。	A	・児童アンケートで、授業内容が「よくわかった」「わかった」と回答する児童は合わせて90%で、自分の学びについてはある程度満足している児童は多い。今後、授業の振り返りを他者と共有することで、自分の学びの成果と課題をつかませ、夢や目標に向けて頑張ろうとする気持ちを高めていく必要がある。
〇特別支援教育の充実	〇教員の専門性と意識の向上	〇特別支援教育に関する専門性が向上した教師80%以上を目指す。	・特別支援教育に関する研修会を実施する。 ・ケース会議の開催、連絡会による情報共有をする。	A	・夏季休業中に特別支援教育に関する研修会を実施した。 ・毎週水曜日に「気になる子」の情報共有を行った。また、必要に応じてケース会議、支援会議も実施できた。	A	・職員対象のアンケートで「特別支援教育に関する専門性が向上した」、と答えた教師は86%であった。今後はさらに実践へ向けた具体的取り組みや手立てについて探っていく必要がある。

●・・・県共通　〇・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・学力向上対策評価シートを活用して、児童の実態を基にした授業改善策を全職員で共通理解するとともに、「授業づくり123」も活用しながら全職員で共通実践ができた。次年度は、授業の「まとめ」や「振り返り」を充実させて自己の成長を自覚させるとともに、「毎日の授業がよくわからない」と回答した児童に対する個別の指導・支援や家庭学習への取組を充実させ、学力の底上げを図っていきたい。 ・「山内合言葉」の日常的な唱和、「思いやりの木」プロジェクトの年間を通した取組、人権週間・平和週間の取組を行ったことで、児童アンケートにおいて「学校が楽しい」と回答した児童が91%、「自分や友達のことを大切に思って行動している」と回答した児童が94%に達した。今年度の取組内容の意義を全職員で確認するとともに、児童に対しては学校行事の目的やそこで培った力を自覚させる活動を工夫して、次年度も全職員で共通理解のもと教育活動を展開していきたい。 ・運動会、走ろう大会等の体育的行事を工夫し、児童の体力向上を図ることができた。また、給食委員会の活動や栄養教諭とのティーム・ティーチングによる授業を実施したことで、「健康に食事は大切である」と考える児童が98%に達した。今年度の取組内容の意義を全職員で確認し、次年度も共通理解を図りながら、継続的して体力向上や健康な食習慣の定着を図っていきたい。